埼玉県・私立
大宮開成中学・高校

進学校への転換

教師の意識の統一と指導力向上の工夫で生徒の自学自習を促進

◎校訓は「愛・知・和　21世紀を担う調和のとれた人間教育」。最難関国立大を目指す「特進選抜・国立先進」、難関国立大・難関私立大を目指す「特進選抜・国立Ⅰ類」、国公立大・難関私立大を目指す「特進選抜・国立Ⅱ類」、難関私立大を目指す「特進S」「特進α」「特進β」の計6コースを設置。

設立
1959（昭和34）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約500人

11年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は北海道大、東北大、千葉大、埼玉大、一橋大、東京工業大、首都大東京、横浜国立大などに計41人が合格。私立大は慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1041人が合格。

住所
〒330-8567
埼玉県さいたま市大宮区堀の内町1-615

電話
048-641-7161

Web Site
http://www.omiyakaisei.jp/HS/

変革のステップ

背景
◎1990年代に、2年連続で定員割れとなる。高卒者の大学進学率向上に伴い、進学校への転換を図る
STEP 1

実践
◎徐々に普通科の割合を増やし、カリキュラムを変更。併せて、コースごとに「マニフェスト」や「VIS」を設け、教師の意識を統一
STEP 2

成果
◎教師の熱意が生徒に伝わり、学校全体が一丸となって進路実現を目指す体制が確立。国公立大には5年連続で40人以上が合格
STEP 3

学校存続の危機に直面し進学校への転換を目指す

大宮開成中学・高校は、埼玉県さいたま市にある私立の進学校だ。かつては普通科の他に商業科や家政科などを擁する学校で、卒業後は就職する生徒が大半だった。1990年代に入り、大学進学への意識が社会全体で高まる中、同校の卒業後の進路は依然として就職が中心であり、それが入学者数の減少につながっていた。相馬正治教頭は、当時の状況を次のように話す。

「公立や他の私立校の併願として本校を受験するケースが多く、学校の求心力に課題がありました。また、就職指導が中心だったため、進学指導のノウハウの蓄積が少なく、短大合格者も珍しい状況でした。それらが生徒募集に影響し、県外・市外からの入学者が大半を占めていました。そして、90年代には2年連続で定員割れとなるに至ったのです」

危機感を抱いた同校では、普通科進学校への転換を図ろうと松﨑洋右理事長のリーダーシップの下、改革が始まった。まず96年度、大学進学を目指す「特進クラス」を新設。受験に求められる知識を基礎から付けさせるために、授業時数は平日9時間、土曜日4時間とした。また、3教科で毎回課題を出し、次の授業では確認の小テストを行った。小テストは、課題を解いてくれば確実に得点できるように作問した。

「どの生徒も『勉強が出来るようになりたい』と思っています。しかし、中学時代あまり勉強をせず、学習習慣が定着していない生徒に『家で勉強して来なさい』と伝えるだけでは出来るようにはなりません。学校で課題と小テストというサイクルを徹底することにより、生徒に『やれば出来る』という達成感を持たせ、学習習慣の定着と学習意欲向上を図りました。かなりハードだったはずですが、生徒は勉強したことがテストで解ける喜びを知り、ついて来てくれました」（相馬教頭）

そうした指導を続けた結果、99年度入試で「特進クラス」一期生の一人が埼玉大に現役合格。進学校となるべく体制作りを始めてから3年で、同校初の国立大合格者が輩出したのだった。

大宮開成中学・高校教頭
相馬正治 Soma Masaharu
教職歴11年。同校に赴任して12年目。進路指導部長を兼務。「生徒と共に学び、成長し続けられる教師でありたい」

大宮開成中学・高校
落合 昇 Ochiai Noboru
教職歴36年。同校に赴任して10年目。数学科主任。3学年担任。「熱意を持って指導し、生徒と協調してより良い学習環境を作りたい」

大宮開成中学・高校
阿部俊介 Abe Shunsuke
教職歴13年。同校に赴任して14年目。教務・学年コース責任者。2学年担任。「生徒には何事も自責遂行する責任感と行動力を育みたい」

大宮開成中学・高校
佐野 謙 Sano Ken
教職歴9年。同校に赴任して10年目。英語科主任。3学年担任。「教師の情熱と生徒の情熱が一体となってこそ、志望は実現できる」

大宮開成中学・高校
大友堅詞 Otomo Kenji
教職歴6年。同校に赴任して7年目。国語科主任。学年コース責任者。「矜持」。自らの力を信じ、誇りを持って切磋琢磨できる生徒を育てたい」

若手教師のパワーを生かし学校全体を動かす

初の国立大合格は、同校に大きな弾みをもたらした。2000年度入試では東京外国語大、01年度入試では慶應義塾大や早稲田大と、難関大への現役合格者が続いた。

同校は改革を推し進め、普通科を入学時の学力に応じたコース編成とし、商業科と家政科を順次廃止することとした。相馬教頭は、教師の意識改革が進学体制を構築する上で最も重要なポイントだと強調する。

「教師が生徒の志望を実現させられる教科指導力を身に付けていなければ、進学校には生まれ変われません。また、『進学校にしていこう』という教師の意識も非常に大切です。若い先生方のパワーが起爆剤としてとても重要な働きをしてくれたと思います」

大学受験を目指すコースには若手教師を中心に配置し、専用の職員室を設けた。また、外部から受験指導経験の豊富な講師を招き、授業をしてもらった。若手教師には、時間を作って講師の授業を参観する姿が見られたという。

「教科指導の在り方を模索する若手の先生方にとって、講師の授業は格好の手本となったようです。やがて、講師からの助言を参考にして、校内でもより良い指導を追究しようという雰囲気が生まれました」（相馬教頭）

新採で同校に赴任した英語担当の阿部俊介先生は、赴任当時を次のように振り返る。

「先生方は朝7時には出勤し、夜9時過ぎまで学校に残って、補習や授業研究に取り組んでいました。また、それに応える生徒の姿を見て、生徒の力を伸ばすために全力を尽くすのが教師の責任だと感じました」

進学校への転換が実を結び始める頃には、教科指導や進路指導のノウハウも徐々に確立され、ベテラン教師の意識も変わった。「特進クラス」設置時には反対の声もあったが、生徒が伸びる姿を見て、その後の組織改編にはほとんどの教師が賛同するようになったという。

学力向上に伴い自学自習の習慣化を図る

進学実績が上がるにつれて入学希望者は増

自習室設置当初、利用者は３年生が中心だったが、自習する３年生の姿に影響を受け、現在は１・２年生も多くなった。自習室の利用開始時刻は朝６時30分と早いにもかかわらず、開室を待つ生徒が廊下に列を作ることもある。100人前後が集まり、自習室に入りきれないこともあるほどだ

え、生徒の志望も高くなっていった。そこで、生徒の変化に合わせて、更に改革を推し進めた。

「平日に授業が９時間もあっては、学習だけになってしまい、バランスの取れた高校生活とは言えません。教師の負担も相当なものです。また、教師から教えられるだけで、自ら学びに向かう習慣がなければ、学力の伸びにも限界があります。文武両道を実現する真の進学校となるために、学習だけでなく部活動も奨励し、心身共に調和の取れた生徒を育成しようと考えました」（相馬教頭）

そこで、１日の授業時数を段階的に減らし、現在の７時間授業とした。放課後は自分で工夫して時間を使うよう指導している。

授業時数減に伴い、自学自習の習慣化を狙いとする二つの取り組みを柱に据えた。

一つめの柱は「家庭学習進度表」だ。５教科についてそれぞれ教材を指定し、家庭で休業中に行う学習量の目安を示した。家庭学習用のノートは、定期的に教科担当に提出させ、進捗を確認するようにした。

二つめの柱は、授業の変革だ。教材の難度を上げ、授業の進度も早めた。国語科主任の大友堅詞先生は、この狙いを次のように話す。

「自学自習の必要性を伝えるため、準備をしなければついてこられない授業を行いました。ただ、やみくもに難度や進度を上げるのではなく、予習・復習が出来ていれば確実に理解できるよう、授業を工夫しました。その結果、教師が何も言わなくても、早朝や放課後の教室で自主的に机に向かう生徒が増えていきました」

生徒の自学自習を後押ししようと、09年度には自習室（**写真**）を設けた。生徒から「緊張感がみなぎっていて、息苦しくなる」との声が出るほど、全員が黙々と学習しているという。

自学自習の習慣化には、先輩からの影響も大きい。同校では、志望大に合格した卒業生数人を招いて在校生に話をしてもらう「進路報告会」を開いているが、どの卒業生も予習・復習や自学自習の重要性を強調するという。

「努力して自分の夢をつかんだ先輩の言葉には説得力があり、生徒は『先輩と同じように勉強すれば、自分も志望を実現できる』と思うようです。教師が百回言うよりも、先輩の一言の方が効果は絶大です」（大友先生）

また、コースごとの集会を定期的に開き、各教科担当が、受験の時期から逆算して今どのような学習をすべきか、先輩が同時期に何に取り組んでいたかを伝えている。

教師同士の結び付きを強め教科指導力を高め合う

教師の指導力向上において重要な役割を果たしているのは、「マニフェスト」だ。これは、センター試験の偏差値と大学合格者数における教師の達成目標で、センター試験については５教科それぞれ「偏差値55以上何人」「60以上何人」、大学合格者数については「国公立大何人合格」「最難関私立大何人合格」というように、進路指導部が毎年４月に前年の実績を参考にして教科ごと、コースごとに設定する。

数値目標を示すことに対しては、「目標達成を意識するあまり、成績上位層にばかり手を掛けることになりはしないか」という理由で反対する声もあった。しかし相馬教頭は、次のように話す。

「本校が重視するのは、目標を達成できたかどうかではなく、達成のために何をしたかです。客観的に分かる数値目標を掲げること

で、達成に必要な手立てが見えやすくなり、授業研究や教材研究が活性化するだろうと考えました」

数学科主任の落合昇先生は、「マニフェスト」によって教師の指導力は向上したと話す。

「目標数値はコースごとに設けられているため、生徒の学力に応じた具体的な指導方法を明確な目標の下で話し合えるようになりました。これは、3年生全員の力を伸ばすことにつながっています」

「マニフェスト」を達成する上で鍵となるのが、「VIS」だ。5教科の主任がそれぞれマーク模試で偏差値55以上を取れそうな人数の一覧表を作る。まだ結果は出ていないが自学自習にしっかり取り組み始めている生徒などを載せることが多い。一覧表にすることで、生徒の得意教科、不得意教科がすぐに分かるため、学年団はこれを基に進路指導を行う。

「VIS」は教科指導を振り返る素材としても大きな役割を果たすと、大友先生は話す。

「例えば、他教科で一覧表に挙げられているのに、国語だけ挙がっていない生徒がいたら、国語科ではこれまでの指導を見直し、いかにその生徒の学力を伸ばすかを話し合います。また、教科団は互いに『どの教科よりも生徒の力を伸ばしたい』と考えているため、一覧表から良い意味でのライバル意識を刺激され、指導力を高め合う関係が生まれています」

「VIS」は生徒に公表していないが、同じ大学を志望する「VIS」を各コースから集め、「東京大・数学」「一橋大・英語」というように個別大ごとの指導を行うこともある。同じ大学を目指す者同士を一緒に学ばせることで、互いに切磋琢磨させようという狙いだ。

「マニフェスト」や「VIS」によって、教科間の意見交換も盛んになり、他教科の模試の結果にも目を通すようになったと、英語科主任の佐野謙先生は話す。

「以前は自分の担当教科の成績ばかりに目がいっていましたが、最近は他教科の成績にも注意するようになりました。他教科の先生方と、生徒の志望実現のためにはどの教科の力を伸ばすべきかを話し合う機会も増え、コースや学年、教科の枠を超えた教師の結び付きが強くなったと感じています」

大学受験を通した人間教育を目指す

さまざまな改革を推し進めてきた成果は、安定した進学実績に表れている。国公立大には、07年度入試から5年連続で40人以上の現役合格者が輩出している。

学校に対する評価も大きく変わった。入学式では、うれしそうに記念撮影をしたり、誇らかに校歌を歌ったりする生徒の様子が見られるようになった。近隣地域からの進学者も増え、以前はほとんど見られなかった自転車通学者が、今では全校の約4割近くになるという。

しかし課題もあると、阿部先生は話す。

「苦手科目をすぐに諦めたり、早々と受験科目を絞ってしまったりする生徒を見ると、教師としてまだまだすべきことはあると感じます。受験生である前に高校生なのですから、受験に必要か否かとは関係なく、高校時代に身に付けておくべき知識があることも教えたいと思います」

大友先生は、受験を通して精神的にも成長してほしいと話す。

「学習意欲の持続や苦手科目の克服など、受験には困難もあります。しかし、それを乗り越えた時、生徒は大きく成長しているはずです。受験勉強を通して人間教育を目指すという思いは、本校の全教師に共通しています」

相馬教頭は、今後について次のように話す。

「改革に終わりはありません。進学校として成長を続けるために、教師同士が高め合う環境を更に整え、生徒の力を伸ばせる体制を作っていきます。今までの取り組みを通して、上位層だけでなく中下位層を含めた学校全体の底上げを図りたいと考えています」

大宮開成中学・高校は、進学校としての理想に向かってこれからも前進を続けていく。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2011年4月号指導変革の軌跡「大阪府・私立桃山学院中学・高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）